
魔法少女リリカルなのは～Stand by me×Stand up to～

山田せびあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Stand by me x Stand
up to ~

【Nコード】

N3023R

【作者名】

山田せびあ

【あらすじ】

チートを目指してマジファイト!!

チートになれたはずなのに、天使を怒らせて偏った設定に!

「スタンドオンリー!?!いやいやいや空飛べなきゃ死ぬってッ!」

作中では、『ジョジョの奇妙な冒険』のスタンドが登場しますが、能力の相違点があります。それは仕様ですので、ご了承下さい。

この作品は、『魔法戦士リリカルなのは - 宙を見上げる無限のワ
ルツ - 』、『魔法少女リリカルなのはStrikerS』三人目のイ
レギュラー』と同じ世界の物語です。

登場人物や設定が被っているものもありますが、それは仕様ですの
でご了承ください。

1・0『テンプレ流されマジ転生』（前書き）

どこまでも自己満

更新は気まぐれ

月に一回更新すればいいほうです

1・0『テンプレ流されマジ転生』

「牡蠣と、めんつゆと、ネギ。あ、日本酒もだっけ？」

海鳴市のとあるスーパーで呟く俺。

はたからみれば、齢10にも満たないお子様がかごいっぱい野菜やら肉やら魚やらを買っているのは異様な光景に見えるだろう。

しかし、仕方がない。

俺には親がいないのだから……………

+++++

「パンパカパーン！抽選に当たりましたー！」

は？

目の前に、金髪少女がいた。

あれ？おかしいぞ？

確かつい数秒前にアニメ映画を見ていたはずなんだけど……

「特典として、好きなところにいけまーす！さあどこにしますか？」

「ちょっと待ってくんない？はつきり言おう。さっぱり分らない」

「なに言ってるんですか？第二の人生ですよ」

……………え？

「私は輪廻転生を待つ魂を抽選して、当たった人に豪華景品を与える係なんです。じゃんけんで負けちゃいまして」

「ほう俺は死んだのか」

「はい」

「なんでだ」

「さあ？」

「……………こいつぶつ飛ばしてもいいのか？」

きづいたら知らんところにて、更に、なんでこうなったか分からないときた。

いや、でも抽選ならしかたない、……………のか？

「抽選で当たったからには楽しい人生をプレゼント！、って事なんです」

テンプレだなおい

「なんだ？金持ちの息子にでもなるのか？」

「さあ？」

オイ、マテヤコラ

「私に一任されてるので、勝手に決めていいんじゃないですか？」

あれ？

自由度高い。

「それじゃ、なのはの世界で、魔力無限、で俺が知ってるありとあらゆる力を「あ、マニュアルに能力は一つって書いてあります」……」

「駄々をこねてもしかたないか……」。

じゃあどうしようか。

ん~~~~~。……。

(思考中)

「あの〜まだで「黙ってる今考えをまとめている」……」
「い」

どうしようか。

イロイロ有りすぎてこまるな。

幻想殺し、妖精眼、”虫”、陰陽道、論理魔術、死に神、死ぬ気の
炎、悪魔の実

「あの、まだ「黙れ」」

「あの」「うるさい」「

「あ」「死ね」……………」

いや、だって一つだけだぜ？

悩むよそりゃ。

「ソロモン王の魔術？それともカバラ？銀魂……スタンドも捨て難

いな」

全然決まらないな。

それじゃ第三者の意見を、

キヨロキヨロ

……………あれ？

あいつはどこだ？

「なのはの世界でスタンド使いですねもう変更しません拒否は認めませんから（黒いオーラ全開中）」

あれ？

後ろになにかいるぞ

そしていやな予感しかないぞ？

「ちょっとまで、まだ何のスタンドが決めてないし、時間帯も決めてなッ」「ぶっ飛ベーーーーッ!」「いやそれ生き返らせるセリフじゃなくて殺す感じになってるぞ!?!?てか金づちを振り回すなわーーーーッ!」

巨大な金づちが頭にぶつかると同時に、華麗にホワイトアウト。

どうなるんだろう、俺……………。

2・0『能力求めてマジ空転』（前書き）

なんか終わりが微妙におかしい

2・0『能力求めてマジ空転』

「
はッ！」

目が覚めると、俺はソファーに寝ていた。

どうやらここはリビングらしい。

起きたらソファーって、まるで今まで見ていたのが夢じゃないだろうかという錯覚が生まれてくる。

しかし、ソファーの傍に放置されている手紙には住所が『海鳴市』とかかれている。

間違いなく、なのはの世界に入ったようだ。

「ここが俺の家になるわけか」

活動拠点は手に入れた。

生活用品は揃ってるのだろうか？

起き上がり、家の中の探索を開始した。

+++++

全ての部屋を見終わって気付いたことがある。

ここ俺ん家だわ。

前世に住んでいた自分の家とまったく同じ。

むしろ違つとこつてどこよ？

間取りだけじゃなく、置いてある家具とか小物系も全部一緒なんだもん。

でも、いきなり知らない家に住むよりはいいか。

「能力はどうなつてんだ？」

なんだかんだ流れて飛ばされたから、何のスタンドなのか全然わか

..... うん違かったみたい。

なにこれはずい。

「いったいどうすりやいいんだ？全然でねえじゃねえか。まさか、あの金髪幼女キレてて忘れたのか？」

指を鳴らしながら凄んでみる。

..... ふくろつの置物目掛けてやってもねえ。

はあ、むなしい。

すると、いつの間にか、どたばたと大きな足音がする。

やべ、声デカすぎた。

「お兄ちゃんうるさい！近所迷惑でしょ！」

「おう、すまんすまん……え？」

ちよつとマテ。

俺に妹っていたか？

「も〜〜。朝っぱらからそんなはしゃいで、どっかしたの？」

そう言いながら入って来た自称妹。

「あ？」

そこには、ついさっきこの世界にデキトーにぶっ飛ばした金髪少女がいた。

「デメエ、そこでいったいなにしてやがるッ！」

金髪少女はえ？、え？とろたえる。

「ふざけんなッ！能力が全然使えねえじゃねえかッ！とぼけるのもいい加減にッ……………あれ？」

ちよつと待て。

今俺は誰と話してた？

確か、俺をこの世界に送った金髪少女と話していたはずだ。

しかし、『その姿はリビングのどこにもなかった』。

いったいどういう事だ？

どたばたどたばた。

「ッ!？」

「お兄ちゃんうるさい!近所迷惑でしょ!」

さっきと全く同じセリフを、さっきと全く同じ容姿をした少女は言う。

「あ、ああ。すまん。」

これはなんだ？

何なんだ？

いったいなにがどうなってる？

「お兄ちゃん？どうかしたの？」

「何でもないって。えっと…」

当たり前だが名前がわからない。

『サーシャはね、これから友達の家におとまりにいつてくるから！』

「サーシャ」

声をかける。

「なに？」

小首を傾げる少女。

「どこか出かけるのか？」

その問いに、

「うん！」サーシャはね、これから友達の家におとまりにいつてくるから！」

と答えた。

「じゃあわたしはいくから。ちゃんとご飯は自分でつくってね？栄養はしっかりとってね？それじゃいつてきまーす！」

ガチャ、…ボタン

俺は急いで洗面所に向かう。

やはりと言っべきか。

額にはキング・クリムゾンの「エピタフ」が張り付いていた。

「予知能力。これが俺の力………？」

自重しよ。

3・0『夜食を求めてマジバトるッ!』(前書き)

バトります

3・0『夜食を求めてマジバトるッ!』

あれから丸一日かけて、自分の力を試してみた。

エピタフはもう普通に出せる。

他には、ホワイト・アルバムのスケート、ビーチ・ボーイが何故か指先から針が出た。

今だに発現のための条件はわからないが、まだまだ時間はある。

俺が介入したいのはA・sだからな。

ん？

じゃあ今は何歳かって？

”小学生”です。

いや、ビックリだわ。

妹(?)が幼いなとは思ってたんだが、机の上に小学校への転校につ

いての案内があつてさ。

もう一度鏡を見たら、『あれ？誰このシヨタっ子？』っていう具合にね。

なんか金髪になつてゐるし。

童顔は……当たり前か。

とにかく。

明日その学校へ編入する。

明日は早く起きないとな。

サーシャもいないし、もう寝るか。

+++++

夜中に目が覚めた。

そりゃ、前世では完全に夜型だったからな。

「もつずっと起きてるか」

とりあえずコンビニ行こう。

夜食がほしい。

パジャマの上からパーカーを羽織り、家を出た。

+++++

さて、なんでこんなことになってるんだろうか。

コンビニからの帰り道。

コンクリートをハンマーで力チ割ったらこんな感じ、みたいな轟音が鳴り響いた。

曲がり角の先にいたもの。

それは黒い毛むくじやらの物体と、それと戦う少女だった。

まあ、おそらくなのはだろう。

しばらくは放置しとくか。

てか俺が出なくても一人でなんとかするでしょ。

電柱の影からこっそりとみる。

「リリカル・マジカル！」

「あ、もう封印かよ。つまらん」

さっさと帰ってお菓子お菓子っと。

「きゃあああッ！」

「……………は？」

急いで戻ると、吹き飛ばされ、塀にたたき付けられているのは。

え？

ちょっと待て。

ここはあっさり封印して帰宅する所でしょ？

何やられてんだよ。

毛むくじやらが触手をなのはに伸ばそうとする。

おい、駄目だろ。

ユーノは何をしてる。

触手の先端から槍がとびでる。

おいおい、タイトルに魔法少女ってついてんだろっが。

スプラッターシーンは禁止だろ。

放送できなくなるぞ。

エピタフが未来を映す。

射出された槍は、そのまま一直線なのはの体へと

「止めるオオオオオオオオオオオオオオオオオツ
ッ！」

なのはに全力で体当たりして、吹き飛ばす。

「え!？」

驚愕の表情をするなのは。

わけがわからないようだ。

そりゃそうだ。

変な声が頭に響いて、夜中にできてみれば、しゃべるフェレット

や魔法なんかが出現して、謎の毛むくじやらの怪物。

若干体も震えていた。

怖かったろう。

でもすまん。

俺は魔導師でもなけりや、魔法使いでも魔術師でもない。

スタンドだってまともに使えない。

助けることはできないんだ。

……ここさえなんとかなれば後はどうにかなるはずだ。

だから、俺が盾になってやる。

多分俺も死なねえはずだ。

転生者だからな。

ある程度の幸運とかあるんだろ。

しぶとく足掻いてやるよ。

そんで、噛み付いてやるさ！

ザクンッ！

でも、やっぱり俺は半端者で。

左目と脇腹にある違和感も。

やっぱり未熟な自分のせい。

「あ、あ、ああ……ッ！」

あれ？

なんで泣いてるんだ？

そりゃそうか。

こんな血達磨のデングジャラスシーン見ればな。

右腕を大きく振りかぶって、

”毛むくじゃらの体を削り取った”

大きく体をえぐり出し、その体積を1/3に減らした。

「ぬうおりやアアアアアアアアアアッッ！」

左のブローを放つ。

吹き飛ぶ黒い塊。

そうだ。

考えるな、感じるんだ。

吹き飛ばせ。

ぶっ飛ばせ

殴り飛ばせ。

そのための方法は俺の中にある！

「『ゴールド・エキスペリエンス』ッ！」

いつの間にか変化した両腕。

ターゲットマークのような模様の右腕と、黄金色をした筋骨隆々の左腕。

そこからさらに変化する。

手の甲にてんとう虫のような模様が浮かび上がった。

俺は、突き刺さったままの槍を引き抜く。

痛みなんざ感じない。

最高に『ハイ！』って奴だアアアッ！

風穴が空き、血液が駄々漏れになってる傷口を、”おもいつきり殴り付けた”。

すると、ぐちゃぐちゃと音を立てて形が変わっていく。

血を拭くと、そこには傷もなにもない、深い青色の瞳があった。

「傷が、治った……？」

なのはのそばにいたユーノが言う。

「な、なんて回復速度なんだ」

いや、驚きすぎだろ。

このくらい、

「『ザ』！」

スタンドなら簡単にできる。

「『グレイトフル・デッド』ッ！！」

俺の体から大量の煙りがふきでる。

その場を白煙が覆い尽くした。

ジュエルシールドは再度、槍を撃ち込む。

その槍は、さっきとは違い一本だけだが、先が螺旋状になっており、

サイズが大きいものに変わっていた。

大気を貫く螺旋を、

俺は白く輝いた腕によって掴みとる。

ザ・グレイトフル・デッドは、歳をとらせるスタンドだ。

原作では、戦う相手を急速に歳をとらせ、老人にした。

”だがそれも上手く使えば、成人になることもできるッ！”

金髪で長身。

日本人離れた顔立ちから、するどい眼光をぎらつかせている。

両腕には、白くかなり筋肉質な腕がある。

もともと肌は白いが、それよりももっと白い。

「そうか。そういうことだったのか」

力を込め、槍を砕く。

「俺は昼間に能力を確認したとき、あくまでスタンドを”出そうとした”」

ジュエルシードを睨みつける。

「しかし、違った。スタンドは原則として、一人につき一つだということを忘れていた」

足を向ける。

それだけでジュエルシードがたじろいだ気がした。

「その中でも、一体化型のスタンドは目に見える形でのスタンドは出て来ない。本体そのものが能力を使う。俺はその一体化型ではなく、”人間型を自分の側に出現させようとした”。一度たりとも、”一体化型を出そうとは思って無かった”」

つまり、と。

俺は言う。

「俺のスタンドは、一体化型のものッ！その能力は既存のスタンドの能力を自らの体を媒体にすることで使用できるッ！名付けてッ！」

「『ヒーローズ・メディウム』（英雄達の媒体）ッ！！」

「ゴガアアアアッッ！」

突っ込んでくるジュエルシード。

触手をさらに増やす

数を数えるのも億劫になる程の量だ。
その全てを、叩き潰そう。

そして始まる本当の意味で始まる。

俺の原作介入が。

今こそッッッ！！！！

「『スター・プラチナ』ッ！」

「ハア……ハア……ハア……」

予想以上に疲れた。

精神エネルギーを形にするもの……だったか。

それに、自分も動いてるから、全力で走りながらミレニウム・セブンを解くようなものだ。

頭ん中が沸騰しそつだぜ。

「その君」

とりあえずなのはに声をかける。

「ッ！は、はい」

「私では封印の作業は出来ない。任せてもいいか？」

デバイスもない俺が封印することはできないからな。

「分かりました。ボク達がやります」

答えたのはユーノだった。

しかし、少し警戒してるようだ。

「そうか。頼んだ」

さっきからやせ我慢してるが、今すぐぶっ倒れてもおかしくない。
視界がぐるぐると回って、脂汗が浮いてる。

気持ち悪い。

「あ、あのッ！」

「……………なんだ？」

早く帰らせてくんないかな…………。

「あなたの、…………あなたのお名前をおしえてください」

「上杉^{うえすぎ} 序夏^{ついか}だ。それじゃ、縁があればまた」

強引に会話を断ち切り、帰る。

疲れた。

すぐにねよう。

+++++

家に帰るなり、居間になっころがってそのまま夢の中に旅立った。

3・0『夜食を求めてマジバトるッ!』（後書き）

スタンドの色ってあまり決まっていなくてですね

漫画のカラーや、ゲーム、フィギュアもみんな違ったり……

ゴールド・エキスペリエンスは何色だろう…

フィギュアは白だけど、ゲームは黄金だし…

やっぱりゴールドのほうがいいですかね？

主人公紹介（前書き）

そのまんまです

だいたいこんな感じの人です

主人公紹介

本名：上杉うえすぎ 序夏ついか

偽名：カイゼル・マーカス

年齢：9歳（精神年齢17歳）

外見：金髪青眼。ネギまのフェイトみたいな髪型。底が見えないような、全てが見透かされているような目つき。（実際はばーっとしてるだけ）

保有魔力量：A A

魔導師ランク：魔法が使えないため、測定不能。

魔力光：山吹色。

使用術式：まだ無い。

好きなもの：音楽を聞きながらの読書。

嫌いなもの：うるさい奴。俺様系。（初期のギーシュ）お嬢様系。（『オーホッホッホッ、貴方のような平民風情が』みたいな奴）

趣味：人物画

スタンド能力について：

ヒーローズ・メディウム
(英雄達の媒体)

自分自身の体を、元に部分的にスタンドになる。

完璧なイメージが必要なため、全身構成はなかなかできない。

道具型は、体の一部を変化させたり、そのまま出現させたりと色々。

スタンドを出していると、常に魔力が減っていく。

時間を操る能力があるスタンド、『スター・プラチナ』、『ザ・ワールド』の時間停止、『キラークイーン』の バイツァ・ダスト、『キング・クリムゾン』時間消去能力などは、全身構成しなければ発動できず、しかも他スタンドの数十倍の魔力を必要とするので、一度使うと魔力切れになる。

しかし、近距離パワー型という特性は発揮することができ、時間操作系能力以外の能力と、強力なパワーは他のスタンドと同様のコストで使える。

物質同化型と、群体型のスタンドは使えない。

4・0『学校へいこうマジお久』（前書き）

赤点の作者は勉強のことではいいいいのようです

4・0『学校へいこうマジお久』

次の日。

けたたましい目覚まし時計の音で目が覚めた。

昨夜の疲れが嘘のように吹き飛び、気分爽快さわやかMAX。

カーテンを開くと、心地良い太陽の陽射し。

小鳥のさえずり。

「嗚呼…………、なんとすがすがしいんだ！ぺぎゅるわッ！」

後ろから、衝撃を感じ、硝子に顔から突っ込んだ。

「お兄ちゃん！今日は学校でしょ！早く起きてよ！」

我が妹からの愛の鞭、もとい前蹴り。

「おいこら！部屋に入って早々いきなりどつく奴があるか！ていうか起きてるわ！」

「だったら早く準備してよね！私、先に行くから！」

なんという理不尽な。

だが、反論する前にさっさとでていくマイシスター。

……てかいつの間にか帰って来たんだ？

+++++

カイゼル・マークス。

それが俺のこの世界での名前らしい。

妹がサーシャなのに、和名はおかしいと思い、転校の書類をあさった。

中には、履歴書のようなものが入っており、それによると、俺は三人家族の長男らしい。

母、俺、妹の三人だ。

父親は、昔、事故で他界してるようだ。

母は結構な旅行好きで、しょっちゅう家を空けている。

そのかわり、近所のお姉さんが母がいない間の保護者代理をしてくれている、というのが、隣の家のおばちゃん（お姉さんの母）談である。

+++++

「ここか……」

ただっ広い敷地に、クリーム色の校舎。

その建物の目の前まで来ていた。

いつか見た、『リリカルなのは』で、なのは達が通ってる学校だ。

左右を見渡しながら、歩いている俺は、端から見ると相当な変人にも見えるのだろう。

後ろから、声をかけられた。

「そのアンタ、通学の邪魔よ。」

第一声で罵倒された。

「ああ、すまん」

「まったく、悪いとわかってるなら最初からボサツとしないですよ」

……なんだろう。

何か語尾に『アル』が似合いそうだ。

「ちょっとアンタ！

「アリサちゃん。そんなに喧嘩腰にいったら誰だっぴっくりしちやうよ？」

その後ろからカチューシャを付けた少女。

すずかか。

「ごめんなさい。いきなりでびっくりしたよね？」

「いや、大丈夫だ。気にしないでいい」

すずかの後ろでふんっ、と鼻を鳴らすアリサ。

ファーストコンタクトはあまりよろしく無かった。

「すまないが、職員室の場所を覚えてくれないか？」

「？っていうことは、きみは転校生なの？」

「まあな。どこのクラスかわからないけど」

「同じクラスじゃないことを祈るわ」

この野郎。

+++++

職員室の前で二人と別れ、中に入る。

自分の名前を言うつとすぐに担任教師が来てくれた。

「んじゃ、合図をしたら入ってきてくれ」

「はい」

そう言つて、教師は教室の中へいく。

一番リアルと違つのは髪の色だな。

金髪もちらほら見えるし、茶髪率が高え。

扉の小窓からは、生徒や、教壇の前に立つ教師の姿がよくみえる。

まだ少しワイワイとはしゃぐ生徒達を教師がたしなめた。

「うーし、さつさと席につけよ馬鹿共。座んねー奴はレロレロキヤンディーの刑だ」

「どんな刑だよッ!？」

「おい、廊下。うるさいぞ」

くすくすと笑いがもれてくる。

やべ、はずい。

顔が熱い。

顔面から波動砲を撃ちそうだ。

落ち着け。

素数だ。

素数を数えて落ち着くんだ。

「いいぞ、ナイスなツツコミだ。それじゃ、打ち上げでイツキをした神裂先輩を見て、ドン引きした相良軍曹のモノマネをしながら入ってこい」

「んなことできるかぁッ！作品が違っ上に、リアクションがとりずらいわッ！ドン引きの相良なんか想像できるかぁッ！！」

「というわけで転校生のカイジ・マックスウェル君だ。皆、仲良くするように」

「賭博もしないし、ガンムにも乗らんわッ！名前ぐらい、ちゃんと紹介しろよッ！」

「というのは冗談で、フル・フロンタル一等兵だ。実家はスピード・ワゴン財閥で、その第28皇子。金なら有り余ってるから、ほしけりゃくれてやる。探せ！！この世の全てをそこに置いてきた」

「あ、もうツツコミきれねえッ！！」

クラスでのファーストコンタクトも担任教師のせいでぐっちゃぐちゃになっちまった。

何となく、予想はしていたのだが。

爆笑の渦の中で、見知った顔が三つ。

驚き、笑顔、蔑み。

驚き？

+++++

なんだかんだで昼休みである。

何？

時間の流れが早過ぎるって？

それはメイド・イン・ヘブンを……ではなく、わざわざ語るほどの内容ではない、ということだ。

まともに自己紹介をして、授業が始まって。

うん。

普通だな。

「ぶつぶつうるさい。気持ち悪いわね」

「なんだとコノヤロウ」

「アリサちゃん。めっ」

昼休み始まって早々に、罵倒。

もうお前、あれだ。

あだ名は『灼眼の使い魔』だな。

「誰がツンデレよッ！」

「人の思考を読むなッ！」

「ふたりとも、ストップッ」

チッ。

こいつは後でメツタメタにしてやる。

すずかに感謝するんだな。（負け犬）

「あの！」

「ん？どうした、高町」

「その、あなた」本当にカイゼル・マーカスっていうお名前なの？
”「

.....ん！？

「な、何言ってるんだよ。俺はカイゼル・マーカスだ。そうじゃなかったら何だって言うんだ？」

「上杉 序夏くん」

即答！？

いや、ちょっと待て。

なのはに会った時は青年の姿だったはずだが。

「私のことを突き飛ばして、かばってくれたよね？」

………そうでした。

「ちょっとそれどういう事！？聞き捨てならないわね！」

アリサが目ざとく反応する。

「昨日の夜に車にひかれそうだったのを助けたんだ。たいしたことではない」

「嘘よ。どーせなのはをナンパしようとしてもしたんでしょ！」

「小学生をナンパなんてするかッ！あと10年早いわッ！」

誰かこの話しの腰をバッキバキにへし折る女をどうにかしてくれッ
！！

+++++

「あゝゝゝ疲れた……」

数年ぶりの小学校だったからだろうか。

異様に疲れた。

小学生のパワーマジパナいわ。

「確か…今日は犬型のジュエルシードと戦ったか？」

またイレギュラーが起こる可能性がある。

できれば行きたい。

しかし、またなのはと会ったら、今度こそ言い逃れが出来ない気がする。

「遠距離から隠れて、か…」

.....
なんとかしてみるか。

4・0『学校へいこうマジお久』（後書き）

勉強なんてこの世から消え去ればいいのに……

なんて考える今日この頃

5・0『原作介入マジ疲労』（前書き）

ねぎたま牛井にはまった今日この頃。

5・0『原作介入マジ疲労』

「遠距離……………。なのはに気付かれないように……………」

校舎裏で缶ジュースを飲みながら休んでいたら、あのレロレロキヤンディー教師に見つかり追い出された。

『お前が居たらタバコ吸えねえじゃねーか』だと。

よくあんな奴が教師をやってられるな……………。

+++++

「さて、なんだかんだありつつも神社の境内に来ましたとさ」

今日中にジュエルシードが発動することは分かっている。

素早く対処するために、見晴らしの良く、かつなのはに見つからないような場所。

率直に言おう。

『本殿の屋根の上』に隠れている。

鳥居の辺りで戦うはずだからな。

ここなら見つかる心配は無い……………はずだ。

+++++

二時間後。

俺は今だに屋根の上にいる。

ジュエルシードなんてカケラも姿を表さない。

「……………スナイパーは標的を殺すために何時間も、場合によっては何日も同じ姿勢でいるらしいが……………なかなか辛いな……………」

俯せだった体を半回転させ、目薬を取り出す。

「ん……………」

目を開け、目薬をさそうとした、その時。

「ぎゃああああッ!」

それは現れた。

俺は素早く体を反転させ、俯せになる。

「『スター・プラチナ』。」

瞳が紫色に輝き出す。

視力強化を施し、鳥居付近を注視する。

双眼鏡の比ではないほどの解像度と自由に変更できる倍率。

スター・プラチナ、すげー。

「ガールルルル……」

……あれ？

元は犬だよな？

ジャージ姿で腰を抜かしている女性。

その目の前にいる巨大な四足歩行生物。

その姿が原作と全く違ってた。

それもまずい方向に。

「二つの頭に蛇のたてがみ……。オルトロスかよ!？」

真っ黒い体に、ダラダラとよだれを滴らせる双頭。

「あ、やばい。あの人くわれそう」

あっという間にたてがみで女性を捕らえ、二つの口を大きく開くオルトロス。

俺は素早く鞆に手を入れて、秘密兵器を取り出した。

「セット完了!いくぜツ!」

左手はデコピン。

右手は広げてその上に石。

そして、両腕にスタンドを展開する。

「『キラー・クイーン』!『クレイジー・ダイヤモンド』!」

左手にクレイジー・ダイヤモンド。

右手をキラ・クイーンにする。

「いけエツ！『キラ・ダイヤモンド』ッ！！」

左手の中指でおもいつきり石を弾いた。

高速で飛翔する魔弾と化した石は、真っ直ぐに飛び、オルトロスの背中のたてがみに突き刺さった。

「爆発しろッ！『キラ・クイーン、第一の爆弾』ッ！！」

右手の中に爆発スイッチを出現させ、躊躇なく押した。

「ガルルル、グルルガギュッ！！」

オルトロスの全身がぶるぶると痙攣しだした。

触手が緩み、女性が解放される。

「次イツ！『ビーチ・ボーイ』ッ！！」

両腕が一瞬だけ元に戻り、すぐに左手首に手の平サイズの何かが現れる。

ティラノサウルスの頭部をかたどったリールだ。

その横には巻き取り用のハンドル。

とどめとばかりに、人差し指が伸びる。

1メートル強まで延びた指先には針と、小さい浮き。

そうして出来上がった釣竿を『しならせた』。

さっき射出した石には劣るが、相当なスピードで針が飛ぶ。

オルトロスを回避し真上から、まるで水の中に入るかのように女性の体内に侵入する。

ビーチ・ボーイはそのまま体の中を螺旋状に絡み付いていく。

「ただ引つ掛からせたただだと、内臓が引つ張られてぐちゃぐちゃになっちまうからな……………」

しっかりと頭からつま先まで針が通った事を確認して、

『釣り上げる』。

左腕を引つ張りながら、リールを巻くと、飛んできた道そのままに、ビーチ・ボーイは戻ってきた。

本殿の前にできるだけ柔らかく着地させ、針を外す。

しかし、さっきからこの人一言もしゃべらないな。

叫んでもいいぐらいなのに。

屋根から身を乗り出し見てみると、完全におネンネしている女性。

どうやら触手に捕まれた時点で気絶していたらしい。

「ガル、ルルル、ガギユガリ、ギャラアッ!!」

全身をびくびくと震わせ、異様な鳴き声を放つオルトロス。

こちらからは背中しか見えないが、その立派な蛇のたてがみが膨張し、

『爆発した』。

体の内側、否。

体そのものの爆発。

火薬は爆発すればなくなる。

それと同じで、オルトロスの体そのものが一個の火薬の塊となった

のだ。

小規模の爆発を何十何百と繰り返しながら、サイズを縮めていく。

「ゴッ、ガギャルガオオオルアウツ!!」

ついに全てが燃え付き、コロン、と。

ジュエルシールドが石畳に転がった。

+++++

「あゝゝ……。眠い……………」

終わった事を確認した瞬間。

物凄い疲労感が艦隊を引き連れて波状攻撃をかけてきやがった。

「一気に四体のスタンドは……………すっげーダリい」

正直、左腕はクレイジー・ダイヤモンドではなくスター・プラチナにしておけば疲労も少なかっただろうが……………指弾で狙撃、つていうとクレイジー・ダイヤモンドの方が成功率が高そうな気がした。

体がすぐにも栄養を欲しているのを感じる。

何か食いてー。

「どっちみちこれでミッションコンプリートだ。後はなのはに任せ
て、今日はケーキでも買ってくるか。疲れた時は甘いものが

「ガLLLLルルアッ!」

「食べたいんじゃーッ!そこはやられてろよ!空気読め、宝石モ
ドキがッ!」

あっさりともに戻るジュエルシード。

よし。

ぼっこぼこにするぞコノヤロウ。

「そこで待ってやがれッ!今すぐガチャガチャにしてやるウッ!」

俺は屋根を飛び降りて走り出した。

「ぬおおりやあああッ!『スティッキー・フィンガーズ』ッ!」

両腕をスタンド化する。

「走れジッパァー!」

地面をスティッキー・フィンガーズで殴り付けると、殴った場所からオルトロスの目の前まで、開いた状態のジッパーが伸びる。

500ml缶ほどもあるジッパーの取っ手を掴み、ジッパーを閉める。

すると、そのまま自動的にジッパーが閉まっていき、体ごと大幅に移動させた。

「くられクスヤロウウツ！」

懐に入つた瞬間拳を握る。

そして、打ち出す。

「アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリ
アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリア
アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリア
アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリア
アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリッ
!!!!!!!!!!!!」

最初の一発はよけたが、このラッシュをよけるには、まだまだスピードが足りず、もろに食らっていく。

「積み木を崩したように、体を破壊したのではなく分解した。これなら回復はできないだろう。何てったって体自体はまだそこに存在してるんだからなッ!!」

今度こそ大丈夫だろ。

流石に、この、状態から、ふっかつハ……………。

ブラックアウトする世界。

だがお前の事はしっかりと仕留めてやったぜ。

「ア、リー、……………べでる……………ち……………」

そして俺は完全に気を失った。

+++++

ぐちゅぐちゅと音を立てながら『魔』が動く。

少しずつ、スライムのようにぶよぶよと地面を転がり、一つに纏まっていく。

「グルルルル……………」

それは獣の姿をしていた。

頭は一つだし、たてがみも不完全だが、……………それでも十分化け物だ。

獣は標的を見つける。

体をバラバラにしたうえ、餌も食い損ねた原因。

その少年は死んだように眠っている。

のそり、のそりと少年に近づき、その首筋へと牙を

「リリカルマジカル！」

その言葉を最後に、獣の意識はこの世から消え去った。

5・0『原作介入マジ疲労』（後書き）

誰か英文の暗記の仕方を教えてほしい………

6・0『強襲高町マジ鬼畜』（前書き）

タイトルが思いつかない件

6・0『強襲高町マジ鬼畜』

ああ……………

体が重い

暗い

寒い

……………？

あれ？

寒くねえ

なんだこれ？

ってか結局ジュエルシード封印してねえし

これってもしかして、俺がぶっ倒れてる間に頭からパックンチヨサ
れてるんじゃない？

もしかして、俺もう死んでるのか？

.....

ちょ！？

早い！

早過ぎるぞ！

転生キャラがラスボスにも出会わずに死ぬっておかしくない！？

いや

ちょっと待て

暖かいぞ？

？

ここって石畳じゃ……？

ああ……………

……………あつたけえ……………

+++++

「……………あつたけえ……………」

目を開くとそこには、

「あ、起きた！」

馬乗りのなのはさんがいましたとき。

「……………え？は？うおおおおおいッ！？」

「全然、目をさまさないからどうしようかと思ったよ。序夏くん」

ちよつと困り顔になりながら言う。

「いや、すまん。あの、ここは？」

「わたしの家だよ。序夏くん」

い、家が……。

てかその前にこの姿勢は（汗）

「あの、ですね、なのはさん？」

「なのはでいいよ！序夏くん」

「じゃあなのは。その、どいてくれると助かったりとかするんだが……」

ん？と首を傾げるなのは。

「あ、もしかして重かった？序夏くん？」

「いや、そういうわけじゃないが……。まあ、あれだ。やんごとなき事情というか。色々あるんだよ」

ふうん。と、よくわからないがなんとなく理解しましたというような反応をする。

すると、あ、と何かに気付いたように声を上げた。

「ねえねえ、序夏くん」

「なんだ？」

「今日ウチでごはん食べていかない？」

いや、これ以上いたらなんか色々マズイ気がする。

でも、お近づきになるにはいいのか？

一緒にいたほうがこれからは何かと介入しやすい。

あ、ダメだ。

今日の晩飯は俺の担当だ。

サーシャに殺される。

「いやあ、すまん。晩飯を作らなきゃいけ

「食・べ・て・く・よ・ね？」（漆黒の微笑み）

.....はい」

なにあれ！？

ヤベーよマジヤベー！

どれぐらいヤベーって言うマジヤベー！

恐すぎるわ！

断ったら確実に殺される！

コンコン。

軽いノック音が響く。

「なのは。そろそろ晩御飯の時間だよ」

若い女性の声。

美由希さんかな？

「うん、今行く！いこう序夏くん！」

「お、おう」

廊下にぶつかる事3回。

階段にクラッシュする事14回。

体中打撲と擦り傷だらけだ。

「にはははは、ごめんなの」

「これだけやって一言かよ……………」

天真爛漫すぎるわ。

苛つくぐらい。

「君。今うちの妹に変な事考えて無かったか？ゴゴゴゴゴゴ」

「……………いや、考えてないです。つかありえません」

あれ……？

原作ってこんなにシスコンでしたっけ？

二次創作ではよく見かけるけど、一回もそんなぞぶりは無かったと思っただけど？

ヒラヒラ。

ん？

なんか上から落ちてきたぞ？

落ちてきたのは一枚の紙だった。

そこにはこう書いてある。

『高町恭也さんの精神をちょっとばかし弄らせてもらいました』

これって………天使のヤローか！？

アイツなんて事を！

恭也さんとはちょっと仲良く成りたかったのに！

『人の事をガン無視しておきながらよく言えますね？恭也さんに切り刻まれればいいんです！フンッ！』

あれ！？

なんで返事してんの！？

こいつ聞いてんの！？

つてかまだ怒ってんの！？

「ありえませんかとはどういう事だッ！そんな奴になのははやらんッ！」

「アンタ小学生相手になに言ってるんだッ！！」

その時、ずっと座っていた土郎さんが立ち上がる。

あれ？

もしかして土郎さんも改造済み？

「カイゼルくん。何か武道をやってないかい？」

ん？

カイゼル？

あ。

二階にいたとき、なのは俺の事をずっと序夏って呼んでたッ！

しかもそれに普通に返事しちゃったッ！！

なのはを向くとニコニコ笑顔が返ってくる。

『もう逃げられないよ？』と言外に語ってる。

「あ、その、兄が剣術をやってた、のでその影響で少しだけ、です、はい」

待て俺ッ！

焦るな焦るな。

素数を数えるんだ。

言葉をしっかりと選ベッ！

矛盾した事を言ったら後で面倒な事になるぞッ！

剣術は兄貴からだ。

いざとなったら連れて来れば

……………あれ？

この世界に兄貴いねえ！

後でサーシャに話し合わせてもらわないと。

「少し私と手合わせをしないかい？なかなか相手がみつからなくてね」

「ま、まあ、少しなら」

動揺をさとられないように必死にポーカーフェイスを作る。

って、へ？

俺が手合わせ？

マジかよ……………。

+++++

今日の教訓。

反射でものを言わないこと。
よく考えて返事しよう

「それじゃ準備はいい？始めッ！」

美由希さんの合図で試合が始まる。

道場のほぼ中央で睨み合う俺と土郎さん。

持ってるのは木刀。

二次創作だとよく小太刀を持ってるのを見るけど今は一本しか持っていない。

本気でやる必要は無いと思われてるんだろう。

それに始まったのに全然かかって来ない。

「来ないのかい？」

俺は基本カウンタースタイルなんだよ。

俺が持つてるのももちろん木刀だ。

2メートルにはすこし足りないぐらいの長刀。

左手で腰あたりに持ち、右手で柄を持つ。

和風早撃ちガンマンだ。

つまりは居合抜きの構え。

基本的に待ちのスタイルだが、こちらからいけない訳ではない。

「……………いきます」

背筋を伸ばし、足を揃え、ゆらゆらと揺れる。

重心をじょじょに前に持っていき、

一気に踏み出すッ！

（シルバー・チャリオッツ・アーマーパージッ！）

制服の中にある腕と脚が変化する。

長袖だから見えないが、近距離戦最速のスタンドの力を発動させたッ！

「『神斬』ッ！」

これには流石の土郎さんでも度肝を抜くはず。

人間には反応することすら出来ないだろう。

一瞬で10メートルを駆け抜け、間にあるものを神速の居合によって切り裂く技。

この体ではそこまでの速さは出ないだろうが、そこはスタンドの力で補う。

ただでさえ残像による分身を作るほどのスピードを誇るスタンドなのだ。

スピードなら絶対に負けるはずがない。

しかし、

「ハアアアアアアアッ！」

その自信は土郎さんの叫びによって霧散した。

「まさかッ！うけきったのかというのかッ！神斬をッ！」

後方から迫る土郎さん。

木刀はまだ動かない。

剣先が少しでも動けば、動いた方向でどのように技を繰り出すかわかってしまうからだ。

上なら面や袈裟。

横は胴や、動きが小さければ籠手。

そのままなら突き。

それがわかってるから、ギリギリまで動かさないのだ。

剣先が僅かにぶれる。

来るかッ！？

俺は木刀をまた腰に構える。

そして、タイミングを見計らい、左手で木刀を持ったまま自分の前に構え、受け止める。

「ッ！？」

驚きに目を見開く土郎さん。

その動きが一度止まる。

俺はただ防御しただけでは止まらない。

防御はこの技の第一段階だ。

一度受け止め、硬直した所に神速の居合を叩き込む。

「『神鏡』ッ！」

今度こそ入ったッ！、とおもいきや。

今度はしっかりと防御されてしまった。

本来この技は鞘で防御する。

鐔ぜり合いをしたまま斬るのだから、相手は防御出来ないわけなのだが、木刀に鞘は無い。

俺が攻撃に入ろうと力を抜いた瞬間に察知されたのだろう。

「ハアッ！！」

「……ッ！！」

防御から一気に転身しての上段。

さがってかわす。

踏み込み、袈裟。

横にステップ。

胴気味の逆袈裟。

木刀を立てて防ぐ。

反撃のチャンスが来た。

刀を水平に。

士郎さんの刀が滑り、俺の頭上を通り過ぎる。

テイクバックを小さくまとめ、胸目掛けて木刀を振る。

今度はこちらが同じように防御される。

くそッ！

決定打が打てないッ！

スタンドもさっきの神斬と神鏡でエネルギーを使い切り、消している。

これ以上使ってもシルバー・チャリオッツ・アーマーパージが通じない以上、体力の無駄遣いだ。

「……………ふう」

最後は籠手を入れられ、木刀をすっぱぬかせた。

完全な敗北だ。

「いや、強いなカイゼルくんは」

「いやいや勝者のセリフじゃないでしょうが」

「でも、あの技だって一朝一夕では体得できるようなものじゃないだろう?」

「あゝゝゝ、まあ。一応上杉家の末裔ですからね。変なしきたりとかで、小さい頃からトレーニングはしてたんですよ」

「上杉家? マーカスじゃないのかい?」

ぬかったッ!

また設定捏造しちゃったッ!

「い、いや、俺の知り合いですよ。その知り合いが兄に教えて、それを見て盗んだんです」

うおいッ！

なんだそりゃッ！

鑓七実の見稽古じゃないんだからッ！

「ふゝん」

あれ？

意外と信じちゃった？

ごまかせて何よりだ。

ふゝん…、と思わずため息をつく。

その時、勢いよく扉が開いた。

「……………土郎さん？恭也？美由希？なのは？カイゼルくん？ご

飯ですよって、何回呼べばわかるんですか？（漆黒の微笑み）

鬼がやってきた。

「「「「い、今すぐいきますッ！……！」「」「」

道場を出るとき、玄関の横に置いてあった土のうが三つほど破裂していたが気にしない事にした。

7・0『あつという間にマジ加入』（前書き）

サブタイトル考えるの大変

ってか、何のネタが分かる人いるのかな？

7・0『あつという間にマジ加入』

さて。

夕食を御相伴にあずかり、しっかりとおいしく頂いた後。

俺はしっかりとなのはの部屋に連行されていた。

部屋の主は目の前で正座して真剣な目を向けている。

ついでにフレット、……いやもう知ってるからユーノでいいか。

ユーノはなのはの肩に乗ってこちらを凝視している。

「わたし、高町なのは。なのはって呼んで」

「カイゼル・マーカス。好きに呼んでくれ」

「それじゃまーくん」

「おいなんだそりゃ」

「え？あだ名」

「やめなさい」

「さつき好きに呼んでくれっていった」

「よし分かった。百歩譲ってあだ名はまあいいとしよう。でもマーカスってのは苗字だ。普通名前をあだ名にするだろ」

「だめだよ。カイくんってもういるもん。阿部 海くん」

ゼルくん。

無いな。

ゼーくん。

わけわかめ。

ゼップルくん。

学園長になる気はない。

「もう片方の名前は？」

「……………さつき華麗に嵌められたからな。

言うしかないか……………」。

「上杉うえすぎ 序夏ついかだ」

「どついう字書くの？」

「上昇気流の上に、杉花粉の杉。序章の序に、春夏秋冬の夏」

「じょう、すぎ……じょ、なつ……？」

何となく先が読めたぞ？

こりゃあれだ。

お約束の奴。

主人公ならみんな一緒。

皆さん一緒に。

せーのっ、

「ジョジョなんてどつ？」

「やめないと耳たぶひきちぎるよ。」

「え~~~~ッ！」

耳を抑えて飛び上がるのはさんでした。

+++++

「
というわけで、俺は前世の記憶を持っ
て、前世が上杉家の次男坊で、今世がマーカス家の長男になっ
てる。
お分かり？」

全部しゃべっちゃいました。

そりゃもう隠し事なんてできないっすよ。

「マーカス家と上杉家が親戚と言っても、サーシャが出てきたら、
上杉？なんのはなし？」になっちまう。

もう弁解とかムリ。

「ふ〜ん」

あ、良く分かってない顔だ。

「それよりも気になるのは君の力だ」

きゅうべ、じゃない。

ユーノが突然切り出した。

「君のあの力は何なんだい？いきなり成長したと思ったら、両腕が無くなるなんて」

「無くなる？俺、腕無くなってたのか？」

「うん。って、気付いてなかったの！？」

スタンド化した腕が見えないだと？

この世界ではスタンドはリンカーコアからの魔力供給により生み出されるんじゃないのか？

じゃあ、これは原作そのもののスタンド。

なら、いやまさか。

俺以外にも…………。

「まーくん!」

「うおっと、すまん考え事してた」

むゝゝゝ、と頬を膨らませるのは。

ハムスターかお前は。

「そいで? 結局なんなの? 俺に何を要求すんの?」

「だから腕が、もういいや…………。とにかく、君は何が目的なんだい? 最初のは、いきなり女の子が襲われてたら助けるかもしれない。でも二回目は違う。ジュエルシードが出現する場所に先回りして戦っていた」

主要キャラ死なせたらストーリーが変わっちまうだろ!!、とは流石に言えない。

「えーっと…………、あれだ! 偶然あそこを散歩してたらなんか叫び声が聞こえてきたんだよ」

すっごい疑わしい目を向けながらも、「そうか……」という。

「わかったじゃあ君はもうこの件に関わらない方がいい。ジュエルシードの事は僕らに任せるんだ」

『私は専門家ですよオーラ』がビンビンとんでくるな。

こういう奴にはやっぱりこのセリフだな。

「だが断る」

「なっ、ちよっ、え？」

目を白黒させるユーノ。

「お前がミスってジュエルシードばらまいちまったんだろ？お前一人の手に余るってことだ」

うっ、と言葉を詰める。

「俺にも手伝わせろ。封印は出来ないけど戦力を削ぐぐらいならでき」

悔し気に齒ぎしりをする。

ちよつとやり過ぎたか？

「……………いったい、何の目的でそんなことをするんだ？」

目的？

目的かあ……………。

「そうだな……………。
翠屋で割り引きとかしてもらえたらなあ……………、とか？」

……………。
……………。

あれ？

え、え~~~~~……

「ふふふ、ふふ、ユーノくん！」

「……………え！？な、何？なのは」

ずっとザ・ワールドしてたユーノがやつと動き出す。

涙目になりながら笑いまくるなのはと対称的に、完全に思考が停止していたユーノ。

「まーくんに手伝ってもらおうよ！」

「いや、でも……」

渋る、がもう決まっただろう。

あの笑顔にはユーノは勝てない。

「はあ……。しょうがないなあ」

「やったあ！ありがとうユーノくんっ！」

途端にはしゃぎだした。

+++++

俺はさりげなく汗を拭う。

やっぱり俺は口下手だな。

物事を一つ進めるだけでもこんなに労力を使っちゃう。

「ふう……………、やれやれだぜ」

「何かあった？」

「いや、何も」

8・0『サッカー少年マジパナイ』

「つ、つかれた……」

なのはがバタリと地面に倒れ込む。

「なのは!？」

「おいおい、大丈夫か？」

深夜。

家を抜けて今日は少し離れた所にある学校での封印となった。

ここ最近、毎晩のように歩き回ってるため相当疲労が溜まってるようだ。

……まあ、俺も疲れてるには疲れてるんだがな。

「明日、あゝもう今日か。今日は休日だ。ゆっくり休んどけ」

「う、うん……」

仕方ない。

「なのは、乗れ」

そう言っつて、俺はなのはの前にしゃがんだ。

「は〜い…」

なめくじのようにニョロニョロと背中に乗る。

「おやすみなさ〜い…」

「おやすみ」

そのまま俺の背中で寝息を立てた。

+++++

「抜き足差し足、千鳥足」

「よろけてどつする」

ナイスツッコミだ、ユーノ。

ベッドに寝かせて、と。

それじゃ俺は退散するとしますか。

「『ストーン・フリー』」

指先から糸を伸ばし、手摺りに結ばせる。

そのままスルスルと降りた。

「うし、じゃあ帰るか」

家の方角へ一歩踏み出した瞬間。

「カイゼル君？」

「士郎さん？」

士郎さんが現れた！

- ・ たたかう
- ・ にげる
- ・ どうぐ
- ・ なめる

……最後の選択がおかしいッ！

「散歩かい？」

「ええ、まあ。どっちかって言うと夜型なんで」

「そうか。休みだからって夜更かしはするんじゃないぞ？……..
ハア」

小さくため息をはく士郎さん。

「どうかしたんですか？」

「いや、明日ウチのサッカークラブの試合があるんだけど、一人
がマイコプラズマでリタイアしてねこれじゃメンバーが足りないん
だよ？」

マイコプラズマか……。

こっちにもあるんだな、そういうの。

「そりゃ残念ですね。代わりの人は見つからないんですか？」

「うん。これがなかなか……」

「あの、……なにか？」

じつ、と俺を凝視してきた。

ッ！？

目力パネエッ……………！

「なあ、カイゼル君」

「はい？」

この瞬間。

明日スーパーの特売巡りをする予定が潰れる事が決定した。

+++++

「『スーパーウルトラデリシャス、中略、大車輪山嵐』イツー！」

ドシュウッ！

俺の足から放たれたサッカーボールは真っ直ぐゴールに向かって突き進む。

「『ゴッドハンド』オッ！」

烈風を巻き起こすほどのシュートは、キーパーの手の平から現れたオレンジ色の手止められた。

「次はこっちの番だ！フォーメーションAmッ！エイトビートッ！」

「ええいッ！なんだこれはッ！本当に小学生のサッカーかッ！？」

「いっけえッ！『9億ベルジャックポット』ッ！」

「チイツ！行っただぞキーパー！死ぬ気で止めるッ！」

「まかせとけ！『ルナ・スターベース』ッ！」

「カウンター行くぞオッ！『シャイニング・ソード・ブレイカー』ッ！」

「まだまだッ！まだ終わらんよッ！『サンライト・クラッシュャー』ッ！」

「ならばこちらも槍だッ！雷神槍『巨神ころし』ッ！……！」

「『元氣玉』アアアアッ！……！」

「『龍拳』ンンンンッ！……！」

必殺技の応酬でもはや試合は点取り合戦だった。

パスを繋ぐことは必要ない。

一撃必殺の技を全員が持つてるからだ。

地面がえぐれ、ベンチはへし折れ、怪我人が続出するがそれでも止まらない。

[illegible]

そこには、真の漢達がいた。

† † † † † † † † † † † †

「…………死ぬ…………疲れた…………」

試合終了のホイッスルが鳴り響くとともに、全身に纏つた黄金のオーラが煙りのように消え去り、入れ代わりに凄まじい倦怠感が襲つてきた。

バタバタと倒れる選手達の中で俺だけが、匍匐前進ではあるが、ベ
ンチまで戻って来れた。

小学生と一緒に倒れるのはなんか嫌だったので、そこはプライドでカバーした。

「大丈夫？はい、紅茶だよ」

そういつてすずかが差し出したそれは、微かに湯気の立ち上る琥珀色の液体だった。

「わたしが煎れてみたの。お口に合えばいいんだけど……」

正直、紅茶などあまり飲んだことがないから、種類とか全然分からねえ。

だが、

「うめえ……………」

そんな俺でも分かるくらいおいしかった。

鼻孔をくすぐるほのかな香りや、ふんわり広がる優しい味。

「わざわざ強調しなくても分かってるわ。まったく、お子ちゃまなんだから…」

「なんですってッ!？」

「まあまあ(汗)」

最後に一悶着ありながらも、っていうかもはや一種の習慣と化した舌戦の後、それぞれが自分の日常に戻って行った。

さて、今回のジュエルシードはかなり凶悪化しているのは言うまでもない。

まともに戦っても、勝てるかどうかは正直なところ五分五分がせいぜい。

というわけで、原作でジュエルシードを持っていたゴールキーパー。

阿部 海からジュエルシードを回収しておこう。

「オーイ、海ー」

「ん？どうした？ま・あ・く・ん？」

「よし、歯あ食いしばれ」

「え？ちよ、ま、」

ゴガンッ！

+++++

「青い石？」

たんこぶをさすりながら、海が言う。

「そ、青い石。落としたんだけど、見なかったか？」

よし、これで一個獲得。

「んーーーー！。見てないな」

え？

「み、見てない…？」

「うん、見てないぞ」

どうしょ……………。

「そうか、ありがと。また学校で」

「じゃあね」

あれ……………？？？

まさかのイレギュラーだよ？

これじゃ次がどこに出るか分からんじゃないか！

「まーくん！」

なのは？

「ジュエルシードが！」

+++++

そしてやってきました、森の中。

ここらへんでも一番デカイ、通称、ていうかまんま『大柳』。

その中心に青い輝きが見える。

ざわざわと根本からつごめく様は、さながら暴れ柳だな。

気を抜かない限りダメージをくらつことは無いだろうが、このままじゃ捕獲出来ない。

「どうするか……………」

「序夏」

ユーノが声をかける。

「策がある。それをするために、あの枝をどうにかしてほしい」

相変わらず声が硬い。

信用なんてしてないんだろうな。

「……………任せろ。やってやんよ」

さーて。

植木職人のバイトを始めますか。

ノーギヤラだけど。

+++++

「なのは、序夏が囃をしている間にやろつ。あれを」

「あれって……、朝練のツー!?」

「うん。あれは時間がかかる。だから今からチャージを始めれば、溜めてる間に攻撃されることもない」

……。

「うん、わかった。やろつ。いくよ、レイジング・ハート!」

《all right .
mode change .
cannon mode 》

+++++

「『マジヤンズ・レッド』ッー」

ふわりと、火の粉が俺の体を覆う。

髪から背中にかけてを紅蓮の羽毛が覆った。

「うおおおおおッ！！燃やし尽くせえッ！！」

炎を鞭のような形状に伸ばし、枝に絡み付かせる。

ウッオッオッオッオッオッオッオッオッオッ！！！！！！

断末魔の悲鳴を上げる暴れ柳。

さらに炎を伸ばし、深く絡み付かせた。

もう離れない。

「『クロス・ファイヤー』ッ！」

丸と十字が組合わさったかのような紋様をした炎が暴れ柳に向かっていく。

しかしそれは、

「チィッ！」

直前で弾かれた。

シールドを張ってやがるのか。

キイイイイイイアアアアアアッ！

地面から樹木の槍が生える。

それは全包围から生えると、一部が上に回り込み、完全に逃げ場をなくす。

「くそッ」

+++++

「まーくん！」

遠くで槍に貫かれるまーくんが見えた。

「なのは、今だ！」

ユーノくんの声に突き動かされるように、杖を振るう。

「まーくん!!」

煙の中に叫ぶ。

それが次の瞬間、

バフオオウツ!

いきなり吹いた強風に晴らされる。

(え?)

そこには、背中から陽炎を揺らめかせる少年と、

黄金の魔導師の姿があった。

8・0『サッカー少年マジパナイ』（後書き）

なんかもつ無理

色んな意味で

9・0『真つ黒魔導師マジKY』（前書き）

かなりむりやり

テストもあるんで頭が沸騰中

9・0『真っ黒魔導師マジKY』

迫り来る無数のトゲ。

それは気付いた時には既に遅く、

「くそッ……………」

体にめり込んだ瞬間、

『それらは全て俺の体を通過した』。

「……………」あ？

痛くない。

全くに痛くない。

確実に、根で作られた槍は俺の体に突き刺さった。

刺さったはずなのに、そのまま体を素通りして地面に刺さった。

これはいつたい……………？

ヒュンッ！

「上ッ!？」

己の身に起こったことに驚いたのもつかの間。

空から黄金の光が降ってきた。

それは真っ直ぐに槍を貫き、吹き飛ばし、跡形もなく蹴散らすと、

「バルディッシュ」

《Yes sir》

俺の周りにプロテクションを張った。

「なにを、うわッ!」

次の瞬間、淡いピンク色の光りが頭上を通っていく。

その光りはズゴゴゴゴゴゴ、と凄まじい轟音と共に、ジュエルシードを蹴散らした。

+++++

煙りが立ち込める中で、まーくんが『無傷で』いるのが見えた。

地面に倒れ込み、何かを見上げている。

ゆつくりと粉塵が拡散されていき、視界が晴れるともう一人の人物が浮かび上がった。

黄金。

まるで金の延べ棒が人の形をとったかのようなだった。

「バルディツシュ。ジュエルシード、封印」

《Seal》

空から稲妻が落ちてきて木の残骸に当たったと思ったら、いつの間にか封印され宝石の姿に戻ったジュエルシードが少女の手の中にあつた。

そのままこの場を去ろうとする彼女に、

「まって！」

思わず声をかけた。

「わたし、高町なのは！あなたのお名前は！？」

顔だけ振り返り、答える。

「……………フェイト。フェイト・テストロッサ」

「あの
「次に会ったら敵同士。ジュエルシールドを母さんが欲しがってるから」

言葉に込められた明かな敵対の意志。

でもとても気になった。

彼女の瞳の奥に隠した哀愁にも似た思いが。

「なのは？」

その声にはっとして振り返った。

「まーくん……大丈夫？」

「おう、何とかな。えっと、フェイトだっけ？彼女が防いでくれなかったら今頃俺は吹き飛んでいただろうがな」

とりあえず、とまーくんは一息いれた。

「ジュエルシードが目的なんだろう？理由を話してくれないか？俺達にも出来ることがあるかもしれない」

フェイトちゃんは一瞬ぼかんとした表情を見せた。

が、すぐに顔を引き締める。

「母さんが欲しがってる。それ以外に理由なんていらない」

「なるほど。ところで……………」

愛犬の姿が見えないようだけど、どうしたんだい？」

「ッ！？なんで…」

「さっき君に守ってもらった時これがね」

そういつてまーくんはポケットから一本の毛を慎重に取り出した。

オレンジ色の長い毛だ。

「これ、人の髪の毛ではないよね。それにオレンジの毛なんてありえない色してるから多分使い魔かな？」

すごい。

まーくんの頭の回転の早さもそうだけど、なによりも話し方。

まるで水のように染み込んでくる。

「それは……………」

フェイトちゃんの小さな唇が開こうとするが、

「そこまでだッー!!」

男の子の声が響く。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだッ！詳しい事情を聞かせてもらおうか」

+++++

予想以上に登場がはやいな。

クロノが出てくるのはまだまだ先だと思っていたんだけど…。

「だが、断る」

ここははっきりと拒絶させてもらおう。

「こっちは今立て込んでるんだ。サインなら後にしてくれ」

「ッ！ふざけてるのかッ！」

「人の話しに口出ししてくる奴に言われたかねえ。いいから黙るか、帰るかどっちかにしろ。耳たぶ引きちぎるぞ」

「君は、…何ッ!？」

オレンジ色の閃光が降ってきた。

素早くシールドを張り、魔力弾を弾く。

「だ、だれ!？」

そこにはオレンジ色の毛並みを持つ大きな狼、アルフがいた。

「フェイト！撤退するよ、離れて！」

「逃がすか！」

クロノが負けじと魔力弾を放つが、なかなか当たらない。

「くっ、なら、デカイのを一発……」

クロノのデバイスに青い光りが集束される。

「だめえ！」

なのはがいきなり射線上に飛び出した。

……ってオイッ！！

それと同時に砲撃が放たれ、なのはに向かう。

「『ザ・ハンド』ッ！」

右手にスタンドを出現させ、空間ごと砲撃を削り取った。

後ろを振り向けば、遠くにフェイトの後ろ姿が見えた。

どうやらなのはが飛び込んで来た時点でもう逃げの姿勢に入っていたらしい。

『クロノ、お疲れ様』

空中に顔が浮き上がる。

クロノの母親であり、アースラ艦長でもある、リンディ・ハラオウン。

「艦長。…すみません片方を逃がしてしまいました」

『そっちは今はいいわ。取り合えず、そっちの子達をアースラに案内して上げてくれるかしら？』

「了解です。すぐに戻ります」

そういつてウィンドウを閉じる。

「そついつわけだ。ついて来てもらおうか」

微妙にデバイスを見せ付けるように動かす。

……こいつ。

原作の頃からだが、もっと嫌いになった。

「……………なのは、ユーノ。どうする？」

「ついていった方がいいと思う。三人だけで動くよりはましだろうしね」

「ユーノくんがそついうなら」

そつして一行はアースラの中へと転送されていった。

おとなしくついて行ってやるさ。

コイツにはなにかしてやらないと気が済まないがな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3023r/>

魔法少女リリカルなのは～Stand by me×Stand up to～

2011年9月16日13時30分発行